

靴の歴史散歩(58)

皮革産業資料館 常任委員 稲川 實

前回の高見順著『東橋新誌』の中で、「私はかつてこの桜組の創始者たる西村勝三翁のことを小説に書いた。西村翁は、我が国における軍靴製造の功労者である。その伝記を、私は書こうと思った。それは未だに果してないが、あるとき某誌から小説をもとめられて、素材に窮した揚句、その片鱗を取りあえず書きしるして責めを逃れた。」とあったので、事のついでに、この小説についても検証しておこうかと思う。

検索の結果、高見順が「西村勝三翁のことを小説に書いた。」という小説とは、戦争中の昭和16年(1941年)に、雑誌『現代』(12月号)のために書かれた『日本の靴』という題名の短編小説であることが分った。翌17年2月、他の短編小説8編と共に『諸民族』という題名の単行本に納められ、『新潮社』から出版されている。(写真参照)

さて、本題の小説『日本の靴』は、「日本で一番最初に製靴業に従事したのは誰か。靴屋さんの元祖について、書きたいと思うのだが、この私がそうゆうと、私という作家とそうした題材との結びつきの奇妙さから、或る唐突の感を免れ難いであろう。そこで一応、どうゆうわけで私がこうゆう小説を思いついたのか、その由来をまずもって書きしるして置くのが順序かもしれない。」という書き出しで始まっている。

小説を全文紹介するわけにはゆかないの、そのあらすじだけを簡単に説明しておく。

この作者の代表作『如何なる星の下に』のモデルにもなった友人が、当時隅田川を隔てた向島に住んでいて、そこへ高見順はよく泊りがけで遊びに出掛けていた。そんな或る日、「言問団子でも食べようか」と大倉別邸(現・堤通1丁目アサヒビル寺島貯穀場)近くまで来たら、古風なシルクハットにフロックコートで立つ、民間人らしい銅像に出会ったので、附近に居た女性に聞いたら、「さあ、なんでも靴屋さんの元祖だとかいうことですよ。」と教えられたというのである。

そんなことがあってから、高見順は従軍作家として蘭印(現・インドネシア共和国)に行つた。

そこで原住民の多くは、裸足が普通だった。焼けつくような炎天下のアスファルト道を、何の苦もなく裸足で歩いているのを見、普段気にもかけていなかった靴という履き物に、何か特別なものを感じたという。

……靴というのは、そもそも舶来のものである。西洋風の履き物であって、日本には日本の履き物がある。するといつ頃、洋靴というものが日本に入って来たのだろうか。と考えたら、以前向島で出会った、例の靴屋さんの銅像が思い浮かんだ、というのである。

(この項続く)



かわとはきもの No.113

2000年9月29日発行

登録番号(12)2

発行／東京都立皮革技術センター台東支所
〒111-0023台東区橋場1-1-6
TEL (3876) 2972ダイヤルイン
印刷／株式会社 第一印刷所
〒110-0003台東区根岸2-14-18
TEL (3871) 4261代

本紙表紙記事の無断転載を禁じます。

R70

本文は古紙配合率70%再生紙を使用しています